

平成 22年 3月31日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19720218

研究課題名 (和文) 沖縄における戦争慰霊碑と慰霊祭の地域的特徴の解明

研究課題名 (英文) Characteristics of war monuments and commemorations in Okinawa

研究代表者

上杉 和央 (UESUGI KAZUHIRO)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：70379030

研究成果の概要 (和文)：沖縄県内に残る沖縄戦に関する慰霊碑について、ごく一部の離島を除き、すべての地域を踏査し、これまでに紹介されてきた慰霊碑一覧には掲載されていない慰霊碑があることを発見し、新聞資料等の調査結果とも合わせて、慰霊碑の建立 (撤去) のプロセスには地域差があることを確認した。また、慰霊祭の現地調査や聞き取りを実施し、その実施状況・内容に地域差があることを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：This research attempts to examine the local characteristics of the process of making monuments of the war dead in the Battle of Okinawa, and the various patterns of commemoration of war dead holding in the front of them. It has seemed to be about 400 war monuments in Okinawa in so far, but some more monuments which have never been introduced in any official or academic reports are found by the field surveys. And it is cleared by the research of past newspaper that some monuments made by local residents have already destroyed for integrating to the central monument made by the government.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	390,000	2,490,000

研究分野：歴史地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：慰霊碑・慰霊祭・沖縄戦

1. 研究開始当初の背景

歴史地理学において、「現在」における「過去」の利用とはいかなる意味を持つのかという問題が、新たに注目されている。なかでも

ヌアラ・ジョンソン (上杉和央訳) 「現在の歴史地理」(B.グレアム・C.ナッシュ編 [米家泰作・山村亜希・上杉和央訳] (2005) 『モダニティの歴史地理』下、古今書院

295-319頁)がまとめたように、過去の「戦争」を「現在」という時空においてどのように記憶しようとしてきたのか、という点は、世界的なレベルにおいて歴史地理学の大きなテーマとなっている。そして、その文脈の中で、慰霊碑の建立や慰霊祭の実施を通じて「現在」の景観の中に戦争の記憶が埋め込まれることの意味をめぐって、多くの関心が寄せられるようになってきている。

日本を事例とした研究としては、たとえば広島原爆についての研究があるが、沖縄の慰霊碑についてもいくつかの研究がなされてきた。ただし、それは地理学者の手によるものではない。また、それらは同窓会という社会集団によって管理される「ひめゆりの塔」や、1960年代に他の都道府県が糸満市域を中心に建立した各慰霊碑といった特殊な慰霊碑を対象としたものであり、県内でもっとも数が多い自治会レベルの慰霊碑と慰霊祭、すなわち地域住民がその地域に建立した慰霊碑とその前でなされる慰霊祭については、具体的な調査はなく、その変遷を含め、全体を概観するような展望的な論考すらなされていない状況であった。

そこで、沖縄県内の慰霊碑・慰霊祭についての現地調査を開始したが、その中でこれまでに知られていなかった慰霊碑があること、その点で慰霊碑の総数については、これまで説かれていた以上となることは確実であろうこと、また、慰霊碑や慰霊祭についてはそのすべてを単純にまとめることは不相当であり、関わる人々の社会的・地域的属性などといった点を加味していく必要があること、といった見通しを得ることになった。この成果の一部については、上杉和央(2006)「那覇から摩文仁へ——復帰前沖縄における「慰霊空間の中心」——」(二十世紀研究7、29-52頁)にまとめたが、特に地域的差異といった点についての検討については、不十分なまま残されており、さらなる検討が不可欠な状況であった。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、沖縄県内にある慰霊碑・慰霊祭について、特にその地域性およびその変遷に着目しつつ、研究を進めることを目的に設定した。

慰霊碑建立や慰霊祭は、地域に根ざした大きな社会的・文化的・政治的活動であったにも関わらず、これまでそのような視点から研究対象とされたことがなかった。「戦後」社会というときに、その時間的定位置が示す「現在」と「過去」の関係性は明らかで、慰霊碑や慰霊祭はその関係性が景観に刻み込まれたものと言える。この点で、戦後の地域社会や地域文化の研究に不可欠な題材であるに

もかわらず、これまでは見落とされてきたのである。本研究は、地理学で見落とされてきたこの視点を正面から取りあげる点が大きな特徴となっている。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために選択した研究方法は、下記の4点である。

(1) 慰霊碑の現地調査

慰霊碑がどこに建立されるか。その立地条件については、単に住所を見ても分からない。現地に赴き、その高低や集落との位置関係、眺望、方向などを確認する必要がある。また、現地でこれまで紹介されていない慰霊碑を探すことも重要である。この現地調査は、地域的な特徴を抽出する上で、基礎的な作業となる。

沖縄県は沖縄本島を中心に、いくつもの島嶼から成っており、構成しているすべての地方自治体に慰霊碑があることが分かっている。今回の研究では、沖縄県の地理的特性上、すべての市町村に赴くことは困難となるが、可能な限り赴いて、現地調査を行う方針とする。

(2) 慰霊祭についての聞き取り、および慰霊祭の観察

慰霊碑の現地調査と同じく、慰霊祭についても現地での聞き取りが不可欠となる。予備調査においても、慰霊祭は多様な形態があり、一言で論じることは困難であることを確認している。慰霊碑については不備ながらも、これまで一覧等が作られてきたが、慰霊祭については、そのような網羅的な調査が一切なされていない。

本研究においても、網羅的な調査は不可能であるが、その一端について明らかにできるよう、聞き取り調査を行い、各地の特徴的な慰霊祭については、実際に慰霊祭当日に観察調査を実施する。

(3) 新聞資料等の資料調査

上記(1)・(2)では、主に現在の状況に主眼を置いた調査となるが、本研究は戦後の変遷についても研究目的としている。そこで、『うるま新報』(のち『琉球新報』)および『沖縄タイムス』という地元紙を中心として、慰霊碑の建立や慰霊祭の実施に関する資料を収集して、1945年から現在に至るまでの時間的流れを理解する。

新聞以外の資料についても収集するが、予備調査の段階で、公文書等についてはほとんどないことを確認している。よって、基本的には新聞資料に依拠することになる。

(4) データベース作成

現地調査および資料調査によって明らかとなつて事柄について、慰霊碑ごとにまとめたデータベースを構築する。

4. 研究成果

本研究では、下記の日程・場所で現地調査を実施した。

- ・2007年5月28日～31日：沖縄県公文書館（資料調査）・沖縄県庁（聞き取り）・南城市（現地調査）・糸満市（現地調査）・金光教那覇教会（聞き取り）・沖縄県平和祈念財団（聞き取り）
- ・2007年6月22日～7月2日：沖縄県公文書館（資料調査）・名護市（現地調査）・糸満市（慰霊祭観察、現地調査）・南城市（現地調査）・南風原町（現地調査）・与那原町（現地調査）・西原町（現地調査）・中城村（現地調査）・白梅同窓会（慰霊祭観察、聞き取り）・沖縄県平和祈念財団（聞き取り）・沖縄遺族連合会（聞き取り）



(①白梅同窓会慰霊祭：2007. 6. 23)

- ・2007年12月19日～24日：沖縄県公文書館（資料調査）・久米島町（現地調査）・金武町（聞き取り、現地調査）・うるま市（現地調査）



(②金武町伊芸区の慰霊碑：2007. 12. 22)

- ・2008年6月22日～30日：宮古島市（慰霊祭観察、現地調査）・多良間村（現地調査）
- ・2009年1月22日～26日：石垣市（現地調

査）・竹富町（現地調査）



(③竹富町（波照間島）学童慰霊碑：2009. 1. 25)

- ・2009年6月20日～25日：与那原町（現地調査）・沖縄市（現地調査）・嘉手納町（現地調査）・伊江村（現地調査）・糸満市（慰霊祭観察）、白梅同窓会（聞き取り）



(④沖縄市唐田之上の慰霊碑：2009. 6. 21)

- ・2009年10月22日～25日：糸満市（現地調査）・ずみせん同窓会（聞き取り）・梯梧同窓会（聞き取り）・ふじ同窓会（聞き取り）
- ・2010年2月7日～9日：渡嘉敷村（渡嘉敷島）（現地調査）・白梅同窓会（聞き取り）



(⑤渡嘉敷島の白玉之塔：2010. 2. 8)

これらの現地調査、および新聞資料等の資料調査をもとに、データベースの作成につとめた。

このような作業を通じて明らかになった

のは、次のような点である。

1) 慰霊碑の発掘

沖縄県内の慰霊碑は沖縄県生活福祉部援護課による『沖縄の慰霊塔・碑』(1998)や国立歴史民俗博物館による『近現代の戦争に関する記念碑』(2003)、(財)沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』(2007)、大田昌秀『沖縄の「慰霊の塔」』(2007)などで一覧表が掲載されているが、これらに掲載されていない慰霊碑があることが確認された。たとえば、沖縄市唐田之上郷友会による慰霊碑(写真④)がそうである。現在の慰霊碑は2002年に改修されたものであるが、1951年12月に建立されており、沖縄県内の慰霊碑のなかでも比較的早い時期の建立である。このような慰霊碑でも、これまでまったく紹介されていないことが沖縄県内の慰霊碑・慰霊祭の研究の遅れを物語っている。

2) 慰霊碑・慰霊祭の地域的特色

沖縄戦において最後まで激戦地となった沖縄本島南部では、非常に多くの慰霊碑が建立される。なかでも本島最南端に位置する糸満市には100以上の慰霊碑が集中している。そして、建立主体も地域住民のほか、学校同窓会や企業といった社会組織、他の都道府県、軍人組織といった多様な様相を示し、慰霊祭の開催も盛んである(写真①)。

このようななかで「慰霊空間の中心」として認知される歴史があった。しかし、歴史を紐解けば、一方で糸満市のなかでは、適切な「慰霊空間の中心」を整備するという琉球政府の方針の中で、不適切とされた慰霊碑(納骨堂)が整理・統合されるといった事態も起きていた。そして、その流れに対して、糸満市の各地域では、地域ごとの背景の中で異なる対応を示した結果、現在の慰霊空間が現出していることが明らかとなった。

糸満市域の慰霊祭については、沖縄県主催の追悼式がある、という理由から、地域の慰霊碑では慰霊祭をしなくなった地区もある一方で、一年一度ではなく数回行う地区もあるなど、多様である。また、慰霊祭の方式も仏式、金光教式、非宗教的などさまざまである。

糸満市は沖縄県の「慰霊空間の中心」となっており、その意味でその多様な様相は、沖縄県の慰霊碑・慰霊祭を代表的に示していると言えるが、糸満市には見られない様相が、他地域には存在する。

たとえば、金武町伊芸区では2007年10月に新たに慰霊碑が建立されており(写真②)、沖縄戦の慰霊や記憶が過ぎ去った出来事ではなく、地元住民の中では現在進行形であることを物語る。ただし、伊芸区では米軍基地の問題とも関わりあう中で建立されており、

過去の記憶が現在の中で活用される典型であるともいえる。また、慰霊碑の建立場所が地域的な背景のなかで意味を持つ例証でもある。

渡嘉敷村(渡嘉敷島)には集団自決した村民を含む戦没者慰霊碑「白玉之塔」が建つ(写真⑤)。この慰霊碑は、当初、集団自決の現場を望む場所に建立されたが、米軍基地の敷地内となったために移転された。現在、旧地は返還されており、「集団自決跡地」の碑が建立されている(1993年建立)。

また、八重山地方では銃撃戦とは異なる戦争被害、すなわち疎開先でのマラリア犠牲による死者が多数出た。竹富町波照間島には1984年に波照間小学校創立九十周年記念事業で「学童慰霊碑」が建立されたが(写真③)、それはまさしくマラリアの犠牲となった児童の慰霊碑である。この慰霊碑は疎開先となった西表島を望む場所が選定されている。また、その避難先となった地には、別の慰霊碑(「忘勿石の碑」)が建立されており、慰霊碑の建立場所選定が、地域の記憶の継承と深く結び付いていることがうかがえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 上杉和央(2009)、記憶のコンタクト・ゾーン—沖縄戦の「慰霊空間の中心」整備をめぐる地域の動向—、洛北史学、査読有、11巻、2009、pp.47-72。
- ② UESUGI KAZUHIRO(2010)、Monumental landscape, in KINDA AKIHIRO(ed.), A Landscape History of Japan, Kyoto University Press, pp.243-263。

[学会発表](計2件)

- ① 上杉和央、「慰霊空間の中心」形成のなかで—沖縄県糸満市における戦没者納骨堂／慰霊碑の歴史地理—、日本地理学会 2008年春季学術大会、2008.3。
- ② 上杉和央、「沖縄戦」戦跡巡礼地の創出をめぐる、第10回洛北史学会定例会、2008.12。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上杉 和央(UESUGI KAZUHIRO)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：70379030